

いわゆる「チラリズム」について

国際日本文化研究センター教授 井上章一

……上海で

いくつかの思い出を語ることで、話をすすめたい。

もう、30年近く前のことになる。1987年の秋に、私は中国の上海をおとずれた。そこで、おどろくべき光景を目にしている。

当時の上海は、今のように発展していなかった。交通機関も、まだととのわない。勤めに向かう人々も、よく自転車にのっていた。スカートをはいた女の人も、その点はかわらない。長いスカートの女たちも、ペダルをこぎながら職場へむかっていた。

ロングスカートで自転車を運転するのはあぶないと、多くの人は思われようか。たしかに危険である。スカートの端が、チェーンにからまるかもしれない。へたをすれば、人身事故もひきおこすことになるだろう。

そして、その危うさは、上海の女性もわきまえていた。彼女らも、事故がふせげる工夫を、彼女らなりにほどこそうとする。中には、日本人である私の肝をつぶすやり方で、身の安全をはかっていた人もいた。

少なからぬ女たちがころみた、目を見はらされる手立てを、ここに紹介しておこう。長いスカートで自転車に乗った人は、しばしばそのスカートをたくしあげていた。スカートを思いきりひろげ、前のほうをハンドルにかぶせながら、自転車をあやつる人もいる。

ある横断歩道では、こんな光景さえ見かけたものである。

信号待ちの自転車群が、競輪よろしく、横断歩道の前にならんでいる。信号が青色へかわった瞬間に、多くのライダーたちは脚をあげた。スカートをはいた女性もふくめ、みな大きな動作で、ペダルをふみはじめる。ハンドルへのせたスカートを、パラシュートのようにつくらませた人もいた。

自転車がいっせいに走りだしたところを、正面から見ると、パンツがいくつか目に入る。見ようによっては、路上にさいたパンツの花畑めいてうつらなくもない。あるいは、宙を同じ方向へとんでいく鳥の群れに、なぞらえるべきか。とにかく、彼女たちはスカートの中にあるパンツが、外へ見えてしまうことをいとわない。1987年上海には、羞恥心ゆえのためらいをしめさない女性が、けっこういたのである。

「あれは、恥ずかしくないのか」

女の人にはたずねづらいので、私はそう男たちに聞いている。そのおりにかえってきたある男の返事を、私はわすれることができない。彼は私の前で、こう言いきったのである。

「パンツをはいているから、だいじょうぶですよ」

言われてみれば、なるほどそのとおりである。パンツは、女性器を下からおおっている。これさえはいていれば、性器をのぞかれ、恥ずかしさで身がすくむおそれはない。虚心坦懐に考えれば、彼の返事は筋が通っている。

にもかかわらず、現代日本人の自分は、なぜパンツが見えたぐらいで、うろたえるのか。たかがパンツぐらいで、性感をたかめてしまう。そんなふがない男に、どうして私はなったのだろう。

スカートの奥からパンツがのぞくことを、女が恥ずかしく思う。男が、いかほどかは、うれしく感じる。こういう感性のあり方は、いったい、いつどのようにして形づくられたのか。

上海で見かけた光景と、ある中国人男性の返答は、私にそんな疑問をうえつけた。そして、パンツをめぐる羞恥心の歴史研究へ、私をむかわせたのである。パンツの見える状態が、男女の性感をかきたてる。その歴史的起源と変遷をめぐる追究へ。

その過程で1951年に、こんな川柳がひねりだされていることを、私はつきとめた。

「つむじ風、惜しいがみんな、穿いている」

突風がふいた。着物の裾が、めくれる。あそこも、おがめるかもしれない。ああ、だめだ。みんな、パンツをはいている。がっかりだ……という気持ちが、この五七五にはたくされている。

20世紀なかばの日本男児は、パンツが見える光景に、落胆していた。パンツを女たちがはきだす前の時代も、彼らは知っている。裾がめくれた女たちの、もっと恥ずかしいところを見る機会も、ままあった。パンツでおおわれたそこを目にしても、だからときめきはおぼえない。なんだパンツをはいているのかと、性感をしばませてくれたのである。

そんな日本男児がパンツでよろこべるようになるまでを、私は一冊の本にまとめている。『パンツが見える。』(2002年)として、世に問うた。そのあらましをここでのべてもいいのだろうけれども、気がすすまない。だしおしみをしているのではなく、私自身の興味が、もうそこからはなれている。せつかく発表の場をあたえられたのだから、今考えていることを書きつきたい。

……パリで

上海をおとずれた 1987 年より、さらに 10 年以上話はさかのぼる。1976 年の夏に、私はパリの路上で、たいへん印象的な光景を目にしている。

市中のある通りを歩いていた時のことである。私は、女性のスカートが風でまくれあがるところに、でくわした。地下のメトロで発生した風が、地表の排気口へふきでたせいでろう。そのいきおいで、スカートがひるかえたのである。『七年目の浮気』のマリリン・モンローがしのばれる情景ではあった。

メトロの風は、二人づれの女性をおそっている。ひとりは、とっさに両手でひろがりはじめたスカートを、ふうじこめた。だが両手のふさがっていた彼女の連れは、スカートをふきあげられている。なすすべもなく、下着のパンツを人目にさらしてしまったのである (Fig.1)。

たまたま、私のななめうしろにいた若い男が、その彼女に声をかけた。いや、声援をおくったと言ってもいい。

「ありがとう、おねえさん」、と。

こういう機会に、女性へブラボーという意志をしめせる男は、日本だと、まずいないのではないか。横目でこっそりながめ、だまってやりすごす。たとえ、心の中でありがたく思っている、それを口にしたりはしない。見て見ぬふりというあたりが、日本男児にとっての妥当な、そして常識的なふるまいであるだろう。

だが、くだんのパリジャンは、彼女たちにとどくような声で、感謝の言葉をつげていた。私はその率直な態度に、おどろいている。こういう正直な気持が、この街ではしめせるのかと、うらやましく思った。

さて、スカートを風にまくりあげられた、当の女性である。はじめはぼうぜんとしていた彼女も、男の声援を耳にして、私たちのほうへ顔をむけた。見れば、恥じらいの面持ちもとどめつつ、ウィンクをかえしている。私が無礼だと感じてしまった男の掛け声に、さっそうとした媚態でこたえたのである。

これまた、日本ではありえない光景だと言える。ひっこみじあんな大和撫子なら、恥ずかしくて立ちすくむだろう。その場へしゃがみこんでしまう者だって、いるかもしれない。気の強い人なら、まわりの男をにらみつけるだろうか。あるいは、おっさん、どこを見てるんだと、声をあらげるかもしれない。しかし、ウィンクで応じる女性は、まずいないような気がする。

パリジェンヌが、こういうケースで、みなウィンクをかえしてくるとは、言わない。自分は、いかにもパリらしいそういうふるまいが、にがてだ。そこがパリのいやなところね

と、私につげたフランス女性もいる。だが、そんな彼女でも、ウィンクでの返礼をパリ風だと、みとめてはいた。

私の話を聞いて、「それがパリさ」とこたえてくれたフランスの男も、少なくない。男のギャラントリーと女のコケットリーが、街の中でひびきあう。その度合いで、日本の諸都市は、とうていパリにかなわない。男がだまり、女がにらみかえしかねない日本は、エロスをおしころしているなど思う。

私は、テレビへでてコメンテーターの役をつとめることが、しばしばある。世におこるさまざまな事象を、いくどとなく画面の中から論評してきた。スカートの奥を盗撮する男への批評を、アナウンサーからうながされたこともある。そのおりに、こう自分の意見をくみたてた。

「スカートの中は、街でぐうぜん目にするから、見たほうもしあわせになれるのだ。今日は、ラッキーであった、と。だけど、策をろうしながら、カメラへおさめても、たのしめないだろう。計算どおりにとらえたパンツの写真なんて、どこがいいんだ」

頭から、丸ごと男の気持ちをしりぞけてはいない。スカートからパンツの見える一瞬を、私は眼福の時として位置づけている。全否定とは言いがたい言及である。そこまでしりぞけてしまえば、嘘をつくことになる。そう見きわめてのコメントではあった。

だが、同じ画面におさまっていた女子アナウンサーは、私の物言いをとがめている。街の中でぐうぜん見てしまうのも、できればやめてほしいと、彼女は言う。

「もし、見かけてしまったら、その時は目をそむけてください」

私は、オンエアの最中に、そうたしなめられた。そして、しかられながら、三十数年前のパリを想いおこしている。街でたまさか見かけたスカートのまくれる光景に、日本ではエールがおくれない。パリと日本の街では、こういうことにたいするあつかいが、まったくくちがう。そのことを、彼女の一喝で、かみしめたしだいである。

……リオデジャネイロで

2004年の秋に、リオデジャネイロで2ヶ月半ほどくらしただことがある。リオ州立大学の学生に、日本文化の講義をする教員としてまねかれたためである。今、秋と書いたが、南半球にあるブラジルのリオは、春になっていた。ねんのため、のべそえる。

その講義だが、私の話を聴きにきたのは、おおむね日本語学科の学生たちである。みな、日本文化には、ただならぬ好奇心をいだいていた。硬軟とりまぜ、さまざまな疑問を私にぶつけてくる。

なかに、今でも脳裏からはなれぬ、次のような質問があった。

「日本の男たちは、女がのぞかせる首のうしろに、性的な情感をいだと聞く。それは、ほんとうか。また、かりにほんとうのことだとしても、どうしてそんなところに、日本の男はそそられるのだろう」

首のうしろがセクシュアルに見えるなんて、信じられない。そうブラジルの学生たちは、男女を問わず感じていた。うなじや襟足の色気という日本的な性感の説明を、私にもとめてきたのである。

どうして、首のうしろなのかという読み解きは、とっさにしめせなかった。私は以下のような想いつきで、その場をやりすごしている。

今の若い日本人は、感受性が西洋化、もしくはアメリカ化されている。ゆたかな胸や腰をよろこぶハリウッド風の美学に、洗脳されてきた。自分のことを「おっぱい星人」だどつげる男子も、すくなくない。

だが、それは新しい性感である。伝統的には、首の背面が性的な魅力を形成する、ひとつの焦点となっていた。今でも、胸や腰をとにかく言う男より、首筋の美を語る男の方が、おくゆかしくうつる。そちらの手入れをおこたらない女は、色っぽいとみなされる。君たちも、日本へ留学したおりに、うなじや襟足の魅力に敏感であってほしい。日本文化によくつうじた留学生として、一目おいてもらえるから。

この応答で、いちおうその場はおさまった。学生たちも、とりあえず納得したようである。

私は教室のボードへ、説明のために首筋の図をえがいていた。うなじと襟足、そして盆の窪が、それぞれどこをさすのかも、しめしている。複数の語彙が、首筋をデリケートに区分けしている言語状況にも、言いおよんだ。首のうしろとしてしかしめさない欧米語とも、対比して。

そんな説明を自分でしながら、かえって考え込まれるようになっていく。それにしても、どうしてわが民族はこういう審美感をいだとようになったのだろう。なぜ、第二次性徴の中心からはなれた辺境の地で、ときめきをおぼえるようになったのか。盆の窪などという、諸外国にはない語彙をなりたたせた背景は、どこにあるのだろう。

そう言えば、芸妓たちは^{ぬき}抜き衣紋^{えもん}の衣裳で宴席をつとめる。乳房をおしだすドレスではなく、首筋があらわになる着物で、男たちをもてなしてきた。身体^{からだ}をごらんになるのなら、ここにしておねというような装いで。首筋の化粧にも、たいそう力をいれながら (Fig.2)。

あれは、いったいどういうことなのか。リオの学生たちをてきとうにあしらいつつ、私はそんな疑問をふくらませていった。

リオの男たちは、路上で気に入った女性を見かけると、そちらへ正直に目をむけやすい。自分はあるあなたに魅了されえいるという態度を、はっきりしめし勝ちである。ちらりと横目で見ただけの日本的なふるまいは、けっして一般化していない。

パリでも感じたことだが、いい女にはちゃんと反応する土壌を、彼らはこしらえている。雄^{おす}としては、いさぎよくあるようつとめているようである。くらべれば、日本男児はいくじがないように思える。

ラテン系の男たちがくりひろげるストレートな女性賛美を見て、私は思いついた。抜き衣紋からのぞける首筋は、勇気のない日本男児に対応しているのかもしれない、と。首のうしろ側なら、相手の気がつかない間に、うかがうことができる。いくじのない男でもぬすみ見の快感があじわえる。そういう非力な男たちを背景にしつつ、第二次性徴をさけたあの美学はなりたった。そこに、日本文化の深い何かがあると、今は思っている。

路上でスカートのひるがえる光景を見ても、喝采をあびせることなど、まったく脳裏をよぎらない。一瞬よろこんでしまったことがばれたら、どうしよう。そうおびえる日本男児こそが、あのようなじと襟足の美学をはぐくんだのだと、考える。

……チラリズム

「チラリズム」という言葉がある。これ見よがしのセクシュアルな表現より、一瞬かいま見えるそれをよしとする。そんな精神のありようを、ちらり主義、「チラリズム」とよぶことがある。

この言葉をひねりだしたのは、女剣劇をひきいた 1950 年代の浅香光代である。当時はストリップの興行が人気をあつめており、他の演芸は低迷を余儀なくされていた。ほぼ全裸の女たちを舞台にあげるストリップと、はりあう手だてはないか。その途をさぐった女剣劇は、殺陣^{なて}の場面で着物の裾がめくれる瞬間を、あおっていく。浅香の『女剣劇』(1958 年)には、こうある。

「エロにはエロをだ。ストリップが、そのものズバリの舶来のエロなら、私は、チラリチラリのチラリズムのニッポン的なお色気でいってやろう」

「チラリズム」という言葉は、ここにはじまった。根っ子は、女のエロスを売りこむ手法にある。全面的な露出より、かすかにかいま見えるエロスを重んじる演出法が、起源となる。

ただ、この用語は、興行上の演出という枠をこえ、ひろく普及した。日常生活の場でも、つかわれるようになっていく。のみならず、新しい合成語も、浮かびあがらせる。スカー

トの下から一瞬パンツのぞくことが、たとえば「パンチラ」とよばれた。胸のあいたブラウスから乳房の上半分が見える現象も、「胸チラ」と名づけられている。ブラジャーをさす「ブラチラ」という言い方もある。

「チラリズム」の「チラ」は、かくされることが予期される部分の名辞とむすびつく。そうして、「パンチラ」などといった派生語を、生みだした。浅香は自身のとなえた「チラリズム」を、「ニッポン的なお色気」と評している。じじつ、そのとおりで、この言葉は日本の言語生活にとけこんでいった。まあ、収録にふみきった国語辞典はまだ少ないような気もするが。

さて、「パンチラ」は、パンツが一瞬のぞく状態をさしている。それはたしかに瞬間的なできごとで、「チラ」と形容されるにふさわしい状態だといえる。「チラ」が「パン」とくつつく語彙の歩みに、不可解な点はない。

だが、「胸チラ」はどうだろう。この言葉は、ひらいたブラウスから胸の谷間がうかがえる状態をさしている。そして、その様子が「パンチラ」のように、一瞬で消えさることはない。同じ衣服を着用するかぎり、恒常的に乳房の上半分は、見えつづけるはずである。ほんらいなら、「胸見せ」とでもよぶべき姿であろう。それをなぜ、われわれは「胸チラ」と言いならわしてきたのか (Fig.3)。

おそらく、そこには例の社会通念がはたらいているのだと思う。女のセクシュアルな姿を、しげしげとながめるのはよくない。一瞬の眼福をあげたら、あとは目をそむけるようにしろ。ラテン社会にはあまりうかがえないこの倫理が、日本男児の視線を制御する。そして、われわれの言葉づかいにも、影をおとしているということではないか。

胸の谷間じたいは、なるほどいつも見えている。しかし、それをのぞきこむのは、よくない。一瞥をくべるだけにしておけ。そんな規範こそが、「胸見せ」とよぶべき状態に、「胸チラ」という言葉をあてた。私はそう考えている。

日本でも、若い世代の男は、女たちの乳房をめぐるようになりはじめた。うなじだとか襟足にたいするこれまでの性感は、うしなわれだしている。私はリオの学生にそうつげたし、じじつ事態はそのようにうつりかわってきた。

しかし、若い男たちも、路上で女たちの胸をながめつづけはしない。そういう男もいなくはないが、「ガン見」の好色漢として、あなどられることになる。「ガン見」の語源は、がんがん見ることにあるのだろうか。私は良く知らないので、この点はまちがっていたらかんべんしてほしい。

話をもどす。とにかく、「おっぱい星人」を自称する男子も、路上ではわき見ぐらいですませている。ささやかな「胸チラ」をあじわうていどに、とどめてきた。あるいは、「チラ」

としてうけとめるよう、身心にブレーキをかけてきたと言うべきか。

その意味で、うなじの美学をなりたせた力学じたいは、まだなくなっていない。あいかわらず、ラテン世界とは、おおきなへだたりがある状態を、たもっている。「チラリチラリの……ニッポン的なお色気」鑑賞は、健在であると言うしかない。

この日本的な傾向を、われわれはどうとらえたらいいのだろう。西洋化をおしすすめてきたとされる日本にも、「チラリズム」へのこだわりはのこっている。いずれは、このテーマとむきあい、一仕事を試してみたものである。

〈図版〉

- Fig. 1. 記憶の中のパリ
Paris in the author's memory.
- Fig. 2. 抜き衣紋
Nuki-emon (a pulled-back collar).
- Fig. 3. 胸チラとよばれる光景
Mune-chira (showing breast).

井上章一 (Shoichi Inoue)

1955年、京都市生まれ。京都大学大学院工学研究修士課程修了。国際日本文化研究センター教授、同副所長。専門は建築史、風俗史。主な著書に『つくられた桂離宮神話』(弘文堂、1986年、サントリー学芸賞)、『美人論』(リプロポート、1991年)、『南蛮幻想』(文藝春秋、1998年、芸術選奨文部大臣賞)、『パンツが見える。』(朝日新聞社、2002年)など。近著に『京都ざらい』(朝日新聞出版、2015年)。

(※肩書は掲載時のものです)